

専攻（系・分野）分科等の教員及び研究内容
募集分科等については、各学生募集要項で必ず確認の上、出願してください。

◆ **地球惑星科学専攻（地球物理学分野）** ◆

地球物理学を主とする分野には、次の分科がおかれていて、修士課程における募集人員は分科群ごとに定める。
 ホームページアドレス <http://www.kugi.kyoto-u.ac.jp/>

※博士後期課程2023年4月入学の学生募集の有無は、2022年11月中下旬頃に更新します。

分科名	研究内容	学生募集課程		
		修士課程	博士後期課程	
		2022年 10月入学	2023年 4月入学	
固体地球群（修士課程におけるこの群の募集人員は約11名）				
測地学及び地殻変動論				
宮崎 真一（地球） 風間 卓仁（〃） 深畑 幸俊*（防災） 西村 卓也（〃） 徐 培亮（〃） 西川 友章*（〃） 楠本 成寿*（別府）	この分科では、重力計、傾斜計、伸縮計などの連続観測データを用いた地殻変動や地球潮汐の研究、重力測定による地下構造や質量変動に関する研究、SARやGNSSなどによる精密測位や地殻変動の研究、衛星高度計や衛星重力データなどを用いた地球重力場とその変動に関する研究などに加え、これらの研究に必要な観測計器、観測システムおよび解析手法の開発などをおもな研究対象としている。これにより、観測坑道規模の数mから地球規模の数千kmまで、幅広い空間スケールの地球ダイナミクス、固体地球・流体地球の運動と両者の相互作用など、複雑な地球システムのメカニズムを解き明かし、その背後にある普遍的な地球像を探ることを目指している。これらの研究は、地球物理学教室と防災研究所地震予知研究センター、理学研究科附属地球熱学研究施設にて行っている。	○	○	※
地震学及び地球内部物理学				
久家 慶子（地球） 金子 善宏（〃） 宮崎 真一*（〃） Enescu, Bogdan（〃） 大倉 敬宏*（阿蘇） 飯尾 能久#（防災） 澁谷 拓郎（〃） 大見 士朗（〃） 片尾 浩（〃） 深畑 幸俊（〃） 宮澤 理稔（〃） 西村 卓也*（〃） 伊藤 喜宏（〃） 野田 博之（〃） 山田 真澄（〃） 山下 裕亮（〃） 直井 誠（〃） 西川 友章（〃）	地震学及び地球内部物理学の研究は、地球内部の破壊現象としての地震そのもの（地震の物理）および地球物理学的諸現象の発生場である地球内部の構造・物性・変形等（地球内部物理）の理解をめざすものである。これらの研究は地震発生予測のための基礎的研究ともなるものである。 地震そのものの理解をめざす研究としては、地震および測地データのインバージョン解析による地震の断層破壊過程の研究、海底・陸上観測に基づく南海トラフなどプレート沈み込み境界における滑りの多様性（スロー地震など）の研究、震源断層の掘削や物理計測・注水実験に基づく研究、断層への応力集中過程の研究、数値シミュレーションを用いた地震発生過程の研究などが行われている。 地球内部の構造等の理解をめざす研究としては、地震波データを用いて地殻やマンツルの地震波速度・減衰・散乱構造を調べる研究がなされていることに加え、レーザー関数解析、反射法解析、地震波干渉法等の研究も行われている。また、小型高性能の地震計を多数展開することにより地域的な応力状態等を詳しく調べる研究も行われている。 そのほか、緊急地震速報、地震のトリガリング、地下水の応答、深部低周波地震、地球の粘弾性応答、沈み込み帯のテクトニクスなど幅広い研究が行われている。 これらの研究は、主として地球物理学教室、地球熱学研究施設および防災研究所で行っている。	○	○	※
地殻物理学及び活構造論				
清水以知子（地球） 岩田 知孝（防災） 関口 春子（〃） 浅野 公之（〃）	プレート運動により生起する固体地球の諸現象、とくに地震災害に関係の深い地殻の諸現象を、地球物理学および地形・地質学的手法によって研究する。 島弧地殻や沈み込み帯の幅広い時間スケールの変形を対象として、活断層の調査や断層岩・変成岩の組織解析を行う。低速～高速摩擦試験を行ない、断層のすべり特性を評価する。地下深部の高温高压条件を再現した岩石変形実験を行ない、地殻・マンツル物質の破壊強度や粘性などのレオロジー物性を明らかにする。これらの研究を通して地震発生帯の物理化学素過程を明らかにし、内陸地震や海溝型巨大地震の長期的予測に貢献する。 大地震時の強震動の生成メカニズムを解明するため、震源断層から放出される地震波の生成機構、地殻や大規模堆積盆地を伝わる地震波伝播機構を、地震動データの解析や物理探査等に基づき分析する。強震動生成メカニズムを数値モデリングにより再現するとともに、社会にインパクトを与える極大地震動や長周期地震動の生成条件を解明する。これらの知見を統合し、内陸地震、海溝型巨大地震など、地震タイプに応じた適切な強震動予測を実現するための応用的研究を行う。 これらの研究は、主として地球物理学教室および防災研究所で行う。	○	○	※

専攻（系・分野）分科等の教員及び研究内容
募集分科等については、各学生募集要項で必ず確認の上、出願してください。

※博士後期課程2023年4月入学の学生募集の有無は、2022年11月中下旬頃に更新します。

分科名	研究内容	学生募集課程		
		修士課程	博士後期課程	
教員名		2022年 10月入学	2023年 4月入学	
熱学火山群（修士課程におけるこの群の募集人員は約3名）				
火山物理学				
大倉 敬宏（阿蘇） 古川 善紹（〃） 横尾 亮彦（〃） 宇津木 充（〃） 井口 正人（防災） 大見 士朗*（〃） 中道 治久（〃） 為栗 健（〃） 山本 圭吾（〃） 山田 大志（〃） 風間 卓仁*（地球）	固体地球物理学の研究対象として火山現象を取り上げ、火山の本性を解明するとともに、固体地球の性状を明らかにする。研究内容を大別すると、(a) 火山活動に伴うさまざまな地球物理学の変動（地震活動・地殻変動・地磁気の変化・地熱の変化など）をとらえて、火山活動の様相を解明する。この研究は、火山噴火予知の方法を探る基礎研究ともなる。次に、(b) 火山体の構造をさまざまな地球物理学的方法（地震動・重力・地磁気など）を用いて解明する。さらに、(c) 火山活動はマグマの生成・上昇・噴火のすべての過程をたどるものであって、その根源は上部マントルにあるので、火山現象を通じて上部マントルの性状を解明する問題も研究対象となる。なお、研究の場合は、主として理学研究科附属地球熱学研究施設火山研究センター（熊本県阿蘇郡南阿蘇村）と防災研究所附属火山活動研究センター（鹿児島県鹿児島市）とである。	○	○	※
地球熱学				
大沢 信二（別府） 楠本 成寿（〃） 柴田 智郎（〃） 澤山 和貴（〃） 大倉 敬宏*（阿蘇） 古川 善紹*（〃） 横尾 亮彦*（〃） 宇津木 充*（〃）	この分科では・地球内部熱源に起因するさまざまな現象の解明を目的として、観測的・実験的・理論的な研究を行う。そのための拠点として、世界的に火山・地熱活動の最も活発な地域の一つである中部九州地域に、理学研究科附属の地球熱学研究施設本部（大分県別府市）と地球熱学研究施設・火山研究センター（熊本県阿蘇郡南阿蘇村）が設置されており、両者の提携のもとに研究がすすめられている。研究内容に応じて、これらの施設およびそこに備えられている地震・地殻変動・電磁気・地熱などの観測設備や各種の分析機器を利用できるほか、両施設に蓄積されている研究資料を用いることができる。具体的な研究テーマとしては、地熱流体の流動・水文循環過程、火山・地熱活動の特性、火山地質とテクトニクス、岩石-熱水相互作用、地殻・マントルの熱過程、マントルの化学進化、マグマの発生メカニズムなどがある。こうした多様な研究テーマに対応するため、陸水物理学・火山物理学・地殻物理学・地球内部物理学・地質学・地球化学・実験岩石学など、多岐にわたる関連学問分野の協力のもとに学習と研究を行う。	○	○	※
地球表層群（修士課程におけるこの群の募集人員は約3名）				
環境地圏科学				
井口 正人*（防災） 王 功輝（〃） 寺嶋 智巳（〃） 松四 雄騎（〃） 中道 治久*（〃） 為栗 健*（〃） 山崎新太郎（〃） 土井 一生（〃） 山本 圭吾*（〃） 山田 大志*（〃）	環境地圏科学では、人間圏を取り巻く環境を構成する地球表層陸地部（環境地圏）を対象として、地球物理学および地形学・地質学・地盤力学的なアプローチによって、その現状と変遷に関する地球科学的研究を行う。また、これらの研究を通じて、自然災害を引き起こす環境地圏の自然現象を解明し、応用としての防災・減災の技術・施策を理学に立脚して提案することも主要研究目的の一つである。現在行われている研究内容は、岩石や未固結物質の風化過程、斜面の重力変形や土壌崩壊および斜面崩壊・地すべり等のマスマーブメント過程、地盤内への水の浸透と移動・流出過程およびそれに伴う物質循環、種々の時間スケールにわたる地形変化の過程、火山活動の環境影響、環境地圏と人間圏の歴史的相互作用などに関するものである。これらの研究を実施するために、地質・地形の踏査と解析、野外で採集した試料の力学・水理学・化学・鉱物学的諸性質の測定、斜面水文過程や地震動の観測、地盤の探査、模型実験、数値解析、年代測定などの手法を用いる。これらの研究は、主として防災研究所で行う。	○	○	※
陸水物理学				
大沢 信二*（別府） 柴田 智郎*（〃） 寺嶋 智巳*（防災） 松四 雄騎*（〃） 齊藤 隆志（〃）	陸水物理学は、陸域における水の循環過程を明らかにし、湖沼、河川、地中における水の分布状況、流動機構、さらに水圏と土壌圏岩石圏との相互作用などを物理学的な立場から探求する学問である。水文学、地球化学、地質学、地形学などの諸科学分野と協力して研究を進めることが多い。本分科におけるこれらの学習および研究は、主として理学研究科附属地球熱学研究施設（別府）および防災研究所地盤災害研究部門（宇治）で行われている。地球熱学研究施設では、地下水流動場の構造、地下水流動の力学、各種天然トレーサーを用いた水循環過程、ならびに水-岩石相互作用などについて研究を行っている。防災研究所地盤災害研究部門では、現地調査や観測・実験に基づいて、降水が地表水や地中水、地下水となって循環する過程、それらと地形変化過程の相互作用、これらが陸域の物質移動・水環境形成に及ぼす影響に関する研究を行っている。対象とする現象としては、斜面・溪流・河川における水の流動、それらに伴う土砂の移動（斜面崩壊、地すべり、土石流、表面侵食、浮土土砂など）や各種物質（化学物質、有機物など）の動態である。	○	○	※
海洋群（修士課程におけるこの群の募集人員は約3名）				
海洋物理学				
吉川 裕（地球） 根田 昌典（〃）	この分科では、地球を取り巻く水圏の一部としての海洋における物理過程について、数値実験や海洋観測、人工衛星データや気候データ解析、などの手法にもとづいて研究されている。具体的には、3大洋間の熱や物質の交換機構、深層大循環や風成循環とそれに及ぼす中規模渦の役割、海洋前線域での変動機構、境界層における乱流混合過程や風波、海面を通しての諸物理量の交換過程と大気海洋相互作用などの研究に力が注がれている。これらの学習および研究は主として地球物理学教室で行われているが、防災研究所附属白浜海象観測所の施設や、三重大学生物資源学研究所の練習船や東京大学大気海洋研究所の共同利用研究船などの船舶も利用されている。	○	○	※

専攻（系・分野）分科等の教員及び研究内容
募集分科等については、各学生募集要項で必ず確認の上、出願してください。

※博士後期課程2023年4月入学の学生募集の有無は、2022年11月中下旬頃に更新します。

分科名	研究内容	学生募集課程		
		修士課程	博士後期課程	
教員名		2022年 10月入学	2023年 4月入学	
大気群（修士課程におけるこの群の募集人員は約9名）				
大気科学				
向川 均（地球） 石岡 圭一（〃） 重 尚一（〃） 坂崎 貴俊（〃） 榎本 剛（防災） 竹見 哲也（〃） 吉田 聡（〃） 堀口 光章#（〃） 井口 敏雄（〃） 橋口 浩之（生存圏） 高橋けんし（〃）	地表より約100km までの地球大気を主な対象として、観測的、解析的、実験的および理論的研究を行う。研究分野としては、大気の大気温度構造、運動、組成の物理的あるいは化学的理解を関する大気物理学・大気化学（大気科学）、気候の形成および変動のメカニズムを探る気候システム科学、大気災害や環境変化の科学的理論と予測の向上を目指す大気災害科学・大気環境科学、および、回転や成層のある流体の運動を理解する地球流体力学がある。所属教員は、最先端のエレクトロニクス技術を活用した直接観測・遠隔観測、全球気象データや各種観測データの系統的な解析、スーパーコンピュータを駆使した数値モデル実験、あるいは創意工夫した室内流体実験、などで多くの成果をあげている。現在行われている研究の具体的な対象は、大気大循環、プラネタリー波、重力波、高・低気圧、台風、前線、局地風、大気境界層における微気象・大気乱流、気候システムの物理過程・変動過程、オゾン・水蒸気・温室効果ガスなどの大気微量成分、等々である。研究は、地球物理学教室、防災研究所、および生存圏研究所で行う。	○	○	※
宇宙・地球電磁気群（修士課程におけるこの群の募集人員は約4名）				
太陽惑星系電磁気学				
田口 聡（地球） 齊藤 昭則（〃） 原田 裕己（〃） 松岡 彩子（地磁気） 藤 浩明（〃） 今城 峻（〃）	この分科では、太陽からのプラズマと電磁波の放射、高度とともに急速に希薄化する地球の大気、そして遙か彼方まで広がる地球の磁場の三者が相互に作用しながら作り出す多様な現象について、電磁気学、電磁流体力学、プラズマ物理学をもとにその性質を明らかにする研究を行う。主たる対象領域は、大気の電離が顕著になり始める高度100km付近から上空の領域、すなわち電離圏・プラズマ圏・磁気圏・惑星間空間であるが、下方に位置する中間圏も含まれる。また、地球の磁場に重点を置いた研究では、地球の内部や地表、海底も研究対象領域となる。さらに、地球以外の磁場をもつ惑星の周辺空間も研究対象である。 現在この分科に所属する教員は、オーロラや大気光にかかわる電離圏電気力学、磁気圏の電磁場およびプラズマの構造とダイナミクス、太陽風と磁気圏の相互作用、水星や火星、木星などの惑星の周辺空間の磁場構造、宇宙天気現象、地磁気脈動、地球主磁場のモデル化、地球内部の電気伝導度構造などについて、地上や飛行体からの光学観測、地上・深海底での電磁場観測、大規模な数値計算、先端的なデータ解析手法を用いて研究を進めている。研究は、地球物理学教室と地磁気世界資料解析センターで行われる。	○	○	※
地球内部電磁気学				
吉村 令慧（防災） 山崎 健一（〃） 宇津木 充*（阿蘇） 藤 浩明*（地磁気）	地球電磁気学は、地球規模での磁場分布の観測に始まり、地球磁場の成因論や永年変化の研究に発展するとともに、他方では太陽惑星系電磁気学へと発展している。地球内部電磁気学の分野では、外部磁場変化の電磁感応に基づく地球内部電気伝導度の研究が重要な部分を占めている。一方、観測機器の小型化/省電力化/デジタル化が進み、また取得データの高速解析処理が可能となったことから、資源開発、地震や火山噴火の予知・予測への応用を目指して、地域的な電気伝導度異常の研究が盛んに行われるようになってきている。 この分科では、主に、地球磁場と自然電位の時間変化および電気伝導度異常の三つの分野に関する観測と研究を行う。 地球磁場変化に関しては、地震や火山噴火など地殻活動に関連した応力磁場や熱気体の観測的研究を行い、歪や熱の消長機構を研究する。また、津波の到来によって生じる電磁場変動のメカニズムについて観測的・理論的研究を行う。自然電位においては、活火山や活断層地域での自然電位の観測だけでなく、電気・電磁探査による大地の電氣的構造や透水性等を流動電位理論にあてはめ、地下水や熱水の動態を考察する。電気伝導度異常に関しては、主として地磁気地電流法を用いて、マントル上部から地殻内のテクトニクスに関連した構造の観測研究を行い、活断層の深部構造と内陸地震発生やマントルの深部構造と火山活動との関連性を調べる。 以上の諸研究は、防災研究所、理学研究科附属地球熱学研究施設（阿蘇）及び地磁気世界資料解析センターにおいて行う。また、東京大学地震研究所の共同利用研究施設を利用することもある。	○	○	※

注1) 所属の欄の略記は、次による。

- (地球) 理学研究科地球惑星科学専攻地球物理学教室
- (別府) 理学研究科附属地球熱学研究施設（別府）
- (阿蘇) 理学研究科附属地球熱学研究施設火山研究センター（阿蘇）
- (地磁気) 理学研究科附属地磁気世界資料解析センター
- (防災) 防災研究所（宇治）
- (生存圏) 生存圏研究所（宇治）

注2) 複数の分科に所属する教員は、副とする分科の方に、氏名の後「*」を記入した。

注3) 氏名の後に「#」が付いている教員は、2022年度に退職予定です。また、他の教員についても、他大学等への異動等により退職することもあります。

専攻（系・分野）分科等の教員及び研究内容
募集分科等については、各学生募集要項で必ず確認の上、出願してください。

◆ **地球惑星科学専攻（地質学鉱物学分野）** ◆

地質学鉱物学を主とする分野では主として次のような分科で研究が行われている。研究の内容は必ずしも固定的でなく、2つ以上の分科にまたがる場合もある。
 ホームページアドレス <http://www.kueps.kyoto-u.ac.jp/>

※博士後期課程2023年4月入学の学生募集の有無は、2022年11月中下旬頃に更新します。

分科名	研究内容	学生募集課程		
		修士課程	博士後期課程	
教員名		2022年 10月入学	2023年 4月入学	
地球テクトニクス（修士課程におけるこの分科の募集人員は約4名）				
田上 高広（地鉱） ZWINGMANN, Horst（＃） 堤 昭人（＃） 渡邊裕美子（＃） 大沢 信二（別府）	この分科では、野外調査、室内実験・分析、理論・数値解析などの手法を駆使して地球のテクトニクスに関する多彩な研究を続けている。フィッション・トラック、K-Ar年代測定法と同位体を中心とした地球化学による地殻変動・ホットスポット火山形成の研究、変形解析と摩擦実験、透水実験、熱解析などの手法を用いた断層の総合的・学際的研究や沈み込み帯のテクトニクスに関する研究などが、最近の研究の実例である。また、地球惑星科学専攻の分野横断型研究として、インドネシア等の鍾乳石や樹木年輪を用いた赤道域の古気候・古環境研究も推進している。	○	○	※
地球惑星物質科学（修士課程におけるこの分科の募集人員は約6名）				
下林 典正（地鉱） 三宅 亮（＃） 河上 哲生（＃） 伊神 洋平（＃） 東野 文子（＃）	この分科では固体地球や地球外固体物質の構成物質である岩石や鉱物についての研究と教育を行う。次の2つのグループがある。 岩石学グループ：地殻・マントルを構成する変成岩・火成岩を研究対象とする。野外での産状調査(フィールドワーク)、室内での偏光顕微鏡、EPMA、レーザーラマン分光光度計による造岩鉱物の微細構造の観察と組成分析(相平衡岩石学)、岩石の全岩化学組成分析、岩石組織の解析、流体包有物の解析、U-Pbジルコン年代測定などを主な研究手法とする。これらの手法で得られたデータを基に、プレート収束帯の地下深部物理過程(造山運動)の解明を目指している。現在は、(1)地下深部流体活動、(2)地殻中部～下部の岩石(高温・超高温変成岩類、深成岩類)の観察にもとづくマグマの生成・定置過程と変成作用の関係解明、(3)岩石微細組織の解析にもとづく岩石の形成過程などの研究を行っている。 鉱物学グループ：地球や惑星を構成する主要な鉱物の結晶構造、物性、内部組織などの研究を通して、それらの鉱物の生成条件や生成機構を明らかにし、地球や惑星系における様々なプロセスを理解することを目的としている。天然試料や実験生成物のキャラクタリゼーション(電子顕微鏡法、X線回折、赤外・ラマン分光、CTなど)、室内実験(再現実験など)、計算機シミュレーションなどを研究手段として、(1)造岩鉱物の形成プロセス(相変態やパターン形成)、(2)鉱物の結晶構造の研究、(3)鉱物学に特化した電子顕微鏡法の開発、(4)原始太陽系での物質進化の研究、などを行っている。	○	○	※
地球生物圏史（修士課程におけるこの分科の募集人員は約6名）				
山路 敦（地鉱） 生形 貴男（＃） 成瀬 元（＃） 佐藤 活志（＃） 松岡 廣繁（＃）	本分科では、地球表層の約90%を覆っている地層・堆積物とそれに含まれる化石を対象に、以下の3グループが協力して、(1)古生物の進化史、(2)地形・地層形成のメカニズム、(3)地殻の変動史に関する研究と教育を行っている。 (1)古生物学グループ：「化石」は、過去の生物の形態とその進化史を我々に伝える唯一の直接的証拠であり、過去三十数億年間にわたる生物圏の変遷を映し出すもつとも精度の高いモニターである。すなわち化石の研究は、地質学的時間スケールにおける生物進化の歴史やその要因、さらに今後の生物圏がどうなるのか?という問いに対する答えをその中に秘めている。この化石が語るメッセージを詳細な野外調査や観察を通して読み取り、地球生物圏に関する未解明のバズルを解いてゆくのが古生物学グループの目標である。具体的には、1)古生物の形態や化石産出記録の解析による生物進化過程や古生物多様性変動史に関する研究；2)化石の産状や古生物相解析に基づく地質時代を通じた生物相や生物地理の変遷史に関する研究；3)現生生物の比較解剖学や実験的アプローチによる古生物の機能形態や生態復元の研究などを進めている。 (2)堆積学グループ：地球および地球型惑星や衛星の表層では、堆積物/岩石と流体・生物との相互作用によってさまざまな地形が形成され、変化し続けている。惑星表層に発達した地形はやがて地中に埋もれ、地層として保存されることになる。堆積学とは、この地形発達・変化の動力学を理解し、地層から過去の地球・惑星表層プロセスを復元する科学である。研究手法としては、野外地質調査・室内水槽実験・数値シミュレーションなど複数の手法を総合的に活用する。具体的には、1)野外調査に基づく堆積システム変遷過程の復元、2)水槽実験による地形発達プロセスの解明、3)数値モデルを用いた地形・地層形成条件の逆解析、4)現行堆積過程の観測に基づく地形発達・物質輸送プロセスの解明、などである。 (3)構造地質学グループ：日本列島のような変動帯で、近未来までの地震活動や地殻変動を理解するには、数万年～数億年といった長期にわたる過去のテクトニクスの理解が不可欠である。本グループは、地質調査と方法論的研究の両面からこの問題を追及している。新手法の開発は、新しい観点を与え、これまでにない情報を生み出すからである。具体的には、以下のような研究を進めている。1)さまざまな堆積盆や付加体での、地質調査による島弧海溝系の地史の研究；2)地震の発震機構や活断層の解析により現在の地殻応力を解明する研究；3)断層・岩脈・鉱物脈・機械的雙晶などの地質構造を用いて応力・歪・摩擦係数などを推定する解析手法の開発などである。	○	○	※

専攻（系・分野）分科等の教員及び研究内容
募集分科等については、各学生募集要項で必ず確認の上、出願してください。

※博士後期課程2023年4月入学の学生募集の有無は、2022年11月中下旬頃に更新します。

分科名	研究内容	学生募集課程		
		修士課程	博士後期課程	
教員名		2022年 10月入学	2023年 4月入学	
宇宙地球化学（修士課程におけるこの分科の募集人員は約3名）				
野口 高明（地鋳） 伊藤 正一（＃） 高橋 けんし（生存圏）	本分科では、様々な宇宙地球化学試料（岩石、海洋、生体、隕石、宇宙塵、リターンサンプル）や高圧・熔融実験等の室内合成実験等の多様な試料を研究対象としている。それらの元素組成・同位体組成情報を通じて、さらに、固体試料の場合は、それらの岩石・鋳物学的な情報とも組み合わせて、46億年にわたる太陽系や地球の進化過程を物質化学的見地から明らかにすることを研究目的としている。二次イオン質量分析法、レーザー発生装置と質量分析計を融合した新しい元素分析手法、さらに、電子顕微鏡法、赤外・ラマン分光法を用いることで、固体試料の微小領域の構造や化学組成・同位体組成分析、年代分析を行い太陽系形成初期の物質進化、隕石年代学、地球の形成過程の解明、さらに、過去の地球表層環境の変遷を調べる研究に取り組んでいる。学術研究推進と人材養成に対応した分析・研究体制の構築を目指している。	○	○	※

※ 所属の欄の略記は、次による。

（地鋳）理学研究科地球惑星科学専攻地質学鋳物学教室 （別府）理学研究科附属地球熱学研究施設（別府）
 （生存圏）生存圏研究所（宇治）

注）氏名の後に「#」が付いている教員は、2022年度に退職予定です。また、他の教員についても、他大学等への異動等により退職することもあります。